

23. 血中 Glucagon 測定の臨床的意義

中野 哲	北村 公男	綿引 元
武田 功	熊田 卓	太田 博郷
佐々木智康	伊藤 仁	
(大垣市民病院・二内)		
金森 勇雄	木村 得次	市川 秀雄
松尾 定雄	安田 鋭介	吉田 宏
樋口ちづ子		(同・特放セ)
佐々木常雄	石口 恒男	(名大・放)

各種消化器疾患、肝・膵疾患などの消化器疾患と糖尿病の合計 251 例について、Daiichi OAL-123 の glucagon の RIA kit により、50 G ブドウ糖経口負荷試験を行い、血糖、IRI と共に IRG を測定し、その臨床的意義について検討を加えた。

慢性胃腸炎などの消化器疾患においては、ブドウ糖の負荷後、血糖および血中 IRI は上昇するが、IRG は低下する。

一方、肝疾患においては、軽度の肝障害例では血糖曲線は正常型で IRI、IRG とともに前述の消化器疾患と類似の曲線を示したが、肝硬変、肝細胞癌例では、IRI の分泌は遅延型を呈し、IRG は高値を示し、低下傾向はなかった。

膵疾患としての慢性膵炎、膵癌例での検討では、高度膵障害例が多かったせいか、IRI も IRG も共に低反応を示し、明らかに肝疾患とは異なっていた。なお糖尿病については、軽症例が正常例に近い曲線を示したのに対し、中等度、高度障害群となるにつれ、IRI は低反応、IRG はより高値を示すパターンがみられた。

24. 血中 GI Hormon 測定に関する一考察

樋口ちづ子	金森 勇雄	松尾 定雄
木村 得次	市川 秀男	安田 鋭介
吉田 宏		(大垣市民病院・特放セ)
中野 哲	北村 公男	綿引 元
武田 功	熊田 卓	(同・二内)
佐々木常雄	石口 恒男	(名大・放)

Radioimmunoassay による消化管ホルモンの測定は insulin を初めとし、glucagon, secretin, gastrin, C-peptide などの測定を可能としている。今回われわれは、

これらの各ホルモンの正常域の変動について空腹時の血清および糖負荷前後の血清は当院職員で、妊娠週数での変動については妊婦で、また慢性腎炎で人工透析中の透析前後の患者血清にて測定した。

結果

1) 当院職員の各 GI ホルモン測定値 (M.V.±S.D.)

Insulin; 11.9±2.6 μU/ml (血清, n=32)

Glucagon; 125.9±36.8 pg/ml (血清, n=40)

122.8±28.2 pg/ml (血漿, n=24)

Secretin; 89.3±23.8 pg/ml (血清, n=48)

Gastrin; 91.6±45.6 pg/ml (血清, n=36)

C-peptide; 1.63±0.43 ng/ml (血清, n=39)

2) 50 g glucose 負荷試験時における GI ホルモンの変動

insulin, C-peptide は類似の動きを示し、それぞれ負荷後 120 分、60 分をピークとする一相性のカーブを示した。

Glucagon は負荷後 30 分を最低値とする insulin のカーブの鏡像を示した。

Gastrin と secretin はあまり大きな変動は認めなかった。

3) 正常妊婦における週別推移の GI ホルモン値

insulin は 18 週と 34 週をピークとする二峰性、glucagon はほぼ 20 週をピークとする単峰性、secretin は妊娠の推移に比例し上昇。また、gastrin は 9 週と 36 週をピークとする二峰性を示した。

4) 人工透析前後における血清 GI ホルモン値

insulin, C-peptide は透析後上昇する傾向にあったが、他のホルモンでは一定の傾向がみられなかった。

25. γ CBF 吸入法の新しい functional image について

松田 博史	前田 敏男	羅 錫圭
久田 欣一		(金大・核)
山田 正人		(同・RI 部)

Novo-Cerebrograph の従来の“GRAPHIC”プログラムを改良し、 γ CBF 吸入法の新しい functional image として Activation/Rest image と Laterality image を作製した。前者は Activation の data を同じフロッピーディスクに入れた Rest の data で割り算することにより得た。後者は次式により算出した局所の Laterality index で表わし、また左右対応する局所血流の絶対値を棒グラフ